

ヤン・レツル再考

―書簡集から建築活動をたどる

菊 楽 忍 (広島平和記念資料館)

少なくとも広島では、ヤン・レツル (Jan Letzel, 1880-1925) の名前は、原爆ドームの前身・広島県物産陳列館の設計者として定着し、平成二二年の広島県立美術館特別展「広島から広島へ」ではレツルのコーナーが設けられるほど知名度が上がってきた。著者は公文書館紀要第十六号 (平成五年三月) において、一度レツルの建築作品を概括しその業績を紹介したが、本稿はその後出版されたヤン・レツル書簡集⁽¹⁾、新たに確認された臼井資料⁽²⁾等に基づき彼の日本での建築活動を書き改めたものである。

事務所の設立まで

レツルはチェコ近代建築の父といわれるヤン・コチエラ (Jan Kotěra, 1871-1923) に師事し建築を学んだ後、明治四〇(一九〇七)年七月九日、ドイツ人建築家デ・ラランデ (George de Lalande, 1872-1914) の招きで来日した。

まず、レツルに至る外国人建築家の系譜をたどると、「各分野におけるお雇い外国人の活躍は、おおかた明治十年代をもつて終了している。建築界においても、コンデル (Josiah Conder, 1852-1920) が最後」⁽³⁾ のはずだったが、不平等条約改正を目指して首都計画 (官庁集中計画) が発案され、つまり、東京を西欧建築が立ち並ぶ近代都市に変身させるため、ドイツからエンゲ (Hermann Gustav Louis Ende, 1829-1907) シックマン (Wilhelm Boeckmann, 1832-1902) ゼール (Richard Seel, 1854-1922) たちが招聘された。結局、条約改正は失敗。官庁集中計画は

破棄され、エンデルベックマン設計の仮議事堂、司法省、裁判所だけが実現し、ドイツ風バロック様式の威容を伝えることとなった。エンゲたちの帰国後もゼールは日本に留まり、明治二九年に横浜・山手で建築事務所を開設し、教会堂やミッションスクールを手がけた。このゼールの事務所に、デ・ラランデ (明治三六年五月三〇日に来日) が入所し、ゼールの離日後 (同年十一月十四日)、事務所を引き継いだ。⁽⁴⁾ ここにレツルが入所したのだ。この頃の建築界は、コンドルが英国式建築教育で育てた第一世代の日本人建築家がリードしており、ドイツ系は主流ではなかった。こうして、レツルは傍流の下

イツ系建築家グループの最終組として来日し、古典様式の細部にセセッション・スタイルを加味した「新しい建築」を紹介することになる。

デ・ラランデは「お洒落で陽気、人の良い性格だった。お酒も大好き。金を貯め込むより、おおいに使って人生を楽しむ (略) 風だった」⁽⁵⁾ 横浜・名古屋・神戸に事務所を構え、彼の事務所は「三〇件もの新築の話がある」⁽⁶⁾ という隆

図1 寺内子爵邸正面立面図
(明治四一年、画像提供・臼井斎)

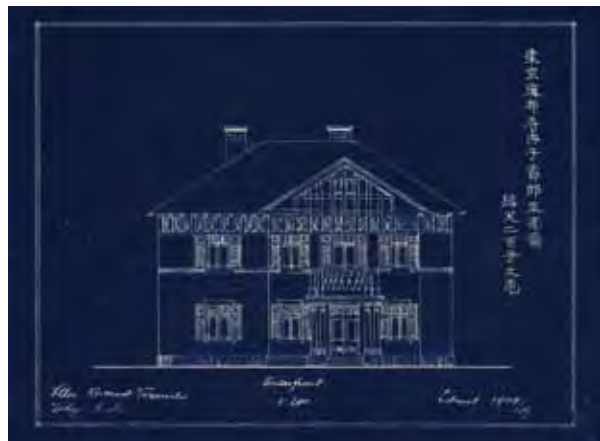
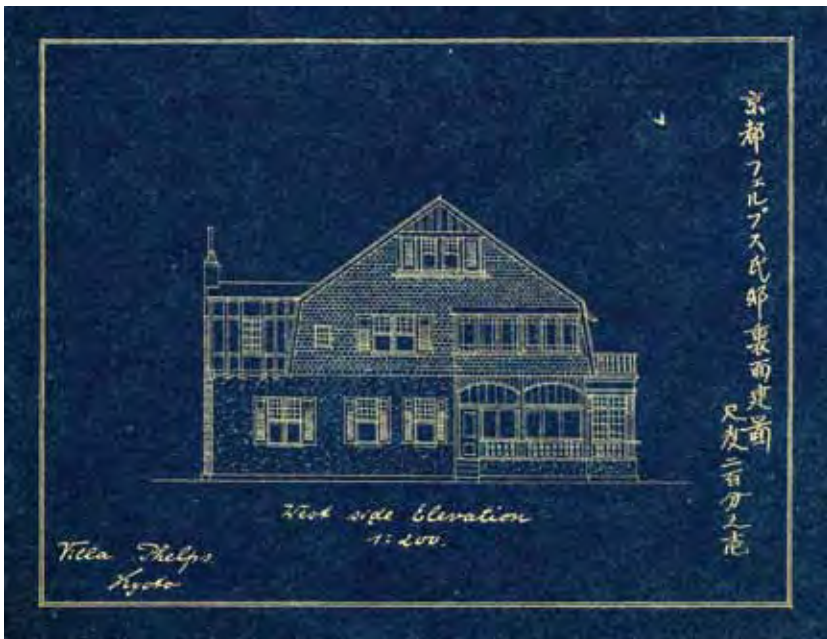


図2 「小さな城」とレツルが記した後藤男爵邸左立面図
(明治四一年頃、画像提供・臼井斎)



盛ぶりだった。レツルは直ぐに事務所代理責任者⁽⁹⁾となった。そして、デ・ラランデを介して、政財界の要人と交流を持った。時の第二次桂内閣の陸軍大臣・寺内正毅子爵⁽⁸⁾（図1）、通信大臣・後藤新平男爵⁽⁹⁾（図2）、三井財閥の重鎮・早川千吉郎たちの邸宅を計画した。⁽¹⁰⁾大臣就任まで台湾総督府民政長官を務めた後藤新平は、台湾総督府庁舎を新築するにあたり、建築設計コンペの実施を主張し建議を提出。これを受けて、日本で最初の設計コンペが明治四〇年に開催された。⁽¹¹⁾レツルもこれに参加。母に「入賞を約束」⁽¹²⁾までしている。

図3 フェルプス邸裏面立面図（明治四二年頃、画像提供・白井齋）



明治四一年四月、

デ・ラランデは住居兼事務所を東京・東信濃町に移転。療養で不在がちな主に代わりレツルや白井泰治らの所員が増改築しながらデ・ラランデ邸で暮らした。⁽¹³⁾お金に無頓着なデ・ラランデも、神戸オリエンタルホテルの契約不備で抱えた負債には悩んだらしい。同年九月、一時帰国を前に各地の事務所を縮小し、デ・ラランデの妻 Edy を代表に新事務所を設立して出直しを図った。新事務所は、利益の六割を

デ・ラランデ、三割をレツル、残り一割をチェコ人エンジニアのホラ (Karel Jan Hora, 1861-1953) で分配することとなった。⁽¹⁴⁾デ・ラランデに代わって、レツルは神戸・京都・名古屋・横浜の現場を往復し、同年冬の東京倶楽部の設計コンペ（一席はコンドル）に応募したりと、⁽¹⁵⁾朝から晩まで馬車馬のように働いている。神戸の風見鶏の館として知られるトーマス邸（明治四二年頃竣工）を小振りにしたデザインが眼を引く京都YMCA名誉主事・フェルプス (G. S. Phelps) の自宅の設計図が残る。（図3）彼はヴォーリス (William Merrill Vories, 1880-1964) に京都YMCA会館の現場責任者の職を紹介した。⁽¹⁶⁾建築家ヴォーリスの出発点は、レツルが代理責任者を務めたデ・ラランデ作品の現場監督であった。

デ・ラランデ帰国中の明治四二年三月時点での注文は「聖心女子学院十三万円」「雙葉高等女学校十六万円」「大日本私立衛生会七万五千元」「長與男爵邸三万六千元」とレツルは記している。⁽¹⁷⁾負債を放置し母国から帰つてこないデ・ラランデにとうとう辛抱できず、明治四二年夏、レツルはホラと独立、「レツル・アンド・ホラ事務所」⁽¹⁸⁾を構えた。彼らの事務所は伝統的に設計と施工を兼ねる日本の大工棟梁と同じ役割を果たした。レツルが建築設計をホラが施工監理を分担していた。

新しいスタイルの邸宅と学校

明治四三年五月二五日発行の『建築雑誌』掲載の時報「近年新築の邸宅」には、「近年東京市内に（略）邸宅を建築し（略）内自分が関係し又は記憶し居るのは目白台の田中子、麻布今井町の三井八郎次郎男、高輪の浅野総一郎氏、番町の高橋是清男、本郷切通しの岩崎男、芝の松方侯、麻布広尾の長與氏、上二番町の早川千吉郎氏、牛込の近藤廉平氏、市ヶ谷の小池恒三氏にて（略）聞けり」とある。

コンドル設計の岩崎久弥茅町本邸（明治二九年竣工）・松方正義邸（明治三八年竣工）等極めつきの豪邸十軒を紹介している中に、レツル関連の「早川」「長與」の二軒が含まれていることが興味深い。早川千吉郎邸の洋館部分がデ・ラランデとレツルが設計した「億万長者の早川邸」にあたり、長與氏の家が長與男爵邸である。

長與男爵邸の施主はドイツ帰りの医学博士・長與稱吉 (1866-1910)。「能く博士

図4 セツション様式の正門から見た徳川邸（明治四三年の竣工時は

長與男爵邸）
（撮影時期・大正時代 画像提供・公益財団法人徳川黎明会）



の趣味に叶い、外観は瀟洒たるものだが内部には荘重の裝飾が施してあり上流邸宅の精粹を發揮した⁽¹⁹⁾とあり、この

ドイツ風の大屋根を持つ邸宅は好評を持って迎えられたようだ。長與は小説家・夏目漱石の主治医としても知られた医政界の実力者だったが邸宅の完成直後に病死。明治四五年四月、最新のセツション様式の優美な正門をもった豪華なヴィラは尾張徳川家に売却され「徳川義親侯爵の麻布富士見町御邸」となった。⁽²⁰⁾（図4）

後藤新平や長與稱吉の人脈でレツルは日本私立衛生会の本

部・会館の設計を受注したと思われる。大日本私立衛生会は明治十六年公衆衛生を向上させるため半官半民の団体として設立され、長與稱吉もその会頭を務めた（明治三四・三五年）。明治四四年六月二五日に行われた盛大な落成式にはレツルやホラも参加し、⁽²¹⁾ 金杉英五郎（医師、1865-1942）による建築の説明や、

副会頭の北里柴三郎の閉会の辞があった。⁽²²⁾ 大日本私立衛生会は楯岡ホールを中心にしたバロック調の平面計画だが、その外観はセツション・スタイルを加味した比較的シンプルなデザインである。昭和十一年の建築学会創立五〇周年を記念して行われた展覧会において、明治元年から大正十五年までに制作された二五〇の建築作品が名品として選定・展示された。レツル渾身の本作品はその一つに選ばれている。

明治四四年四月、東京・上野で開催された勸業博覧会・美術部に、建築学会創立二五周年を記念して辰野・葛西事務所の「中央停車場（東京駅） 図案」等の建築図案八〇点が展示された。⁽²³⁾ この展示会にレツルは「聖心女子学院本館 図案」「聖心女子学院正門 図案」「私立衛生会建築」「長與男爵建築図案」「外人墓地 図案」「客室 図案」の五点を出品し、特に聖心は「繊功細緻の美あり（略）目に付く」と高評を得た。⁽¹⁹⁾ 聖心女子学院の外観デザインは、明治三八年竣工のデ・ランデが設計したドイツ・ルネッサンス様式の煉瓦造校舎、東北学院普通科（中等部）を木造にアレンジしたかのような古典的な様式の強いものであるが、レツルは白金台の敷地の特性を生かし、丘の上にダイナミックなランドマークとなるよう校舎を配置している。徳川侯爵邸（元長與男爵邸）から南の白金台を望むとクラッシックな塔が印象的な聖心の校舎が遠望されたという。また、デザイン面だけでなく「日本は地震の多い土地柄、新校舎は各棟ともに土台が密接につながれていて、屋根が軽く、強震にも耐えられるように設計」⁽²⁴⁾ し、構造面でも工夫を加えていた。聖心女子学院を手始めに**雙葉高等女学校**（一―三期）、**暁星中学校**と手がけ、彼らの作品で東京のカトリック系の学舎を席卷する勢いであった。高等教育機関を設けるため、明治四一年十月に再来日したイエズス会からその学校（現、上智大学）の設計の依頼があったのもこの頃である。⁽²⁵⁾ その後、学校の計画案を提出してから一年以上もイエズス会から音信不通となったり、競争相手となったデ・ランデがドイツ大使館ぐるみでイエズス会の聖職者たちを接待して仕事の横取りを図ったりと、⁽²⁶⁾ 紆余曲折がありながらも、**上智大学校舎（第一期）**は大正三年秋落成した。建物以外にも、カトリック関口教会にフランスのルルドの泉の洞窟を再現した**ルルドの洞窟**（明治四四年竣工）を建設。なお、この洞窟は今も往時のまま東京カテドラル関口教会内にある。

和風ホテルと陳列館

レツルの父はホテルの経営者であった。また、彼のデビュー作はチェコ・プラハのグランドホテル・ヨーロッパ喫茶室。来日して最初の仕事も神戸オリエンタルホテル。彼はホテルと縁が深いように思えてならない。『日本ホテル略史』には、「(明治四二年)十一月築地精養軒濁逸人レツフル設計の新館(客室数三二二)落成す。」⁽²⁷⁾とあるが、この築地精養軒は「外国人居留地比較研究グループ」の川崎晴朗が精密な論考で指摘するように、レツルの設計ではないだろう。⁽²⁸⁾レツルの事務所員だった市石栄三郎が築地精養軒を彼の仕事として挙げているのは、彼がその改装や増築工事を指揮したからではないだろうか。⁽²⁹⁾彼の書簡からは、精養軒の経営者・北村重昌(1874-1945)との協力関係が始まった時期を確認できないが、遅くとも明治四四年頃、宮城県営松島パークホテルの設計を受注する前だと思う。同年春、客室図案を発表し、同年十二月発行の『建築画報』の口絵にはセセッション様式でまとめたホテルのインテリアが掲載されている。⁽³⁰⁾(図5)

前後するが、明治四三年二月号の『建築世界』に「松島公園経営」の記事がある。その内容は、前年の明治四二年に宮城県が(明治になり寺領が没収され廃仏の風潮が盛んになり)「山林ノ盗伐水族ノ濫獲到處三行ハレ其風致ヲ損傷セシコト尠少ナラス、随テ遊賞ノ客ヲ失望セシム」と内務省に上申し松島湾全体が県立公園用地として許可され、翌四三年、松島公園経営協議委員会を組織し策定した公園整備の具体策を紹介したものである。その一環で、公園内にホテルを建設し、日光より北に遊覧しない外国人観光客を誘致することになった。宮城県にホテル経営のノウハウがないため、箱根の富士屋ホテル・日光の金谷ホテル・東京精養軒という外国人向けホテル経営者をアドバイザーに迎え、「設計は奥国人『レツル』氏に委嘱し其の構造に付ては東京精養軒主と合議」⁽³¹⁾し、運営も精養軒に委託した。このホテルの創業時の写真が『松島公園経営報告書』に収録されている。平面プランは左右対称で楕円ドームを持つバロック調であるが、「外観全くは日本風で、松島の風光と調和するように考慮が払われた。」⁽³²⁾外観は外国人受けするジャパネスク(和風仕様)満載で、インテリアは和洋折衷。セセッション様式でデザインされた開口部の壁と木の組み合わせが築地精養軒や東京ステーションホテルと

同工のように見える。

松島パークホテルの設計後、明治最後の年(大正元年)は「約十か月間で一軒しか仕事がない」⁽³³⁾試験の時を迎えた。「存じのとおり日本人建築家は欧米の作品の真似ばかりしている。日本とは気候が違うので、欧米では良いものも日本には不適だとは誰も考えない。建物が完成し使い始めてから日本人建築家は不調に気づく。私が建てた長興邸・大日本私立衛生会・最近の県知事に依頼された松島のホテルはそうではない。」⁽³⁴⁾と強がりをつけている。

同年五月末、賃料の高い銀座の表(電車)通りに面した事務所から、丸の内「三菱三号館」の「高田商会」内に移転した。経費削減の努力もむなしく、やむなくホラはドイツの会社(Mannesmann)の中国代表となり、辛亥革命の騒乱が続く上海に赴くこととなった。大正二年七月一日「レツル・アンド・ホラ事務所」解散。その七月末、一月に宮城県から広島県に転任した寺田祐之(1850-1917)知事から仕事が舞い込んできた。「知事は私の仕事を好んでくれ、広島に招いてくれた。広島に商業・工業用の博物館と宮島にホテルを建てる。」⁽³⁵⁾ホラの不在は

図5 セセッション様式の内装・家具で整えられた築地精養軒ロビー 『建築画報』明治四四年一二月号口絵、所蔵・広島平和記念資料館、寄贈・白井斎



(6) (一) 部内ノアホ軒長精 (東京館京京)

大きかったが、上智大学の建設も始まり、レツルは自信を取り戻し、**広島県産陳列館**、**宮島ホテル**の設計に邁進する。威風堂々たる本格欧風で広島を、ジャパネスクで宮島をデザインした。オーストリアの鉄鋼王ボーラーのために和風趣味の別荘を建築することも決まり、精密な模型が完成した。⁽³⁶⁾ オーストリア大使館の建築担当アドバイザーや大学教授の声もかき、これからというとき、大正三年八月、第一次世界大戦に日本が参戦し、オーストリア国籍のレツルは否応なく敵国人になってしまう。⁽³⁷⁾ 翌大正四年、事務所を閉鎖。⁽²⁹⁾

戦争のため大正四・五年のレツルの書簡は存在しない。建築家レツルの最後を飾るのが、精養軒・北村重昌から依頼された**上野精養軒ホテル**の新築と東京駅舎内の**東京ステーションホテル**（大正四年十一月二日開業）の内装である。⁽³⁸⁾ 上野は松島・宮島と同じく和風の外観。東京駅のホテルには長與男爵邸のものと同種のセセッション・スタイルの照明があり、インテリア全体がこの様式でまとめられている。⁽³⁹⁾ 今秋、東京駅駅舎の復元工事が終わり、東京ステーションホテルも再開することとなる。ホテルも創業時の雄姿を復元してほしいものである。

その後、レツルは第一次世界大戦後に独立したチエコの臨時商務官になり、二度と建築家として活動することはなかった。関東大震災や戦災によって大半の作品が失われてしまったため忘れられた存在となったが、明治・大正期の建築デザイン系の系譜に、本場のセセッションを紹介した建築家として加えられていだろう。

註

- (1) 『ヤン・レツル書簡集』チエ・ナホト ゲート出版、二〇〇〇年（以下『書簡集』）
- (2) 外国人人名録（シヤパン・ディレクトリー）の一九〇七年版以降、デ・ラランデ事務所の所に「T. Usui」がという名前が掲載される。臼井泰治のことで彼は「デ・ラランデの家に住み込んで書生をしながら学校に行き、建築製図を修得した。」（子息・臼井齋談）関東大震災・第二次世界大戦等動乱の時代の中、デ・ラランデ、レツルに関連する図面等の資料を大切に保存された。

(3) 大川三雄他著『図説近代建築の系譜』彰国社 一九八七年 p.26

- (4) 堀勇良著『外国人建築家の系譜』至文堂、二〇〇三年、外国人居留地比較研究グループ著『ヤン・レツルについて』ホテル・レビュー 一九九八年度連載より
- (5) 東郷茂彦著『祖父東郷茂徳の生涯』文藝春秋 一九九三年 p.77
- (6) 『書簡集』1908/2/19付 p.53
- (7) 『書簡集』1908/1/24付 p.50
- (8) 寺内正毅(1852-1919)の明治四一年六月の日記には、十三日、家の新築を高田商会の高田釜吉氏と「独逸技師ドララント」に相談し、翌十四日、「技師ドララント氏家屋設計図ヲ携へてきた」とある。寺内は朝鮮総督に就任。デ・ラランデは寺内の知遇を得て、平壤牡丹台公園・朝鮮ホテル・朝鮮銀行本店・朝鮮総督府庁舎を設計。（村松貞次郎編『日本の建築「明治大昭和」10』三省堂 一九八一年より）
- (9) 後藤新平(1857-1929)は明治・大正・昭和初期の医師・官僚・政治家。「長與男爵邸」の施主、長與稱吉の父・長與専吉(1838-1902)は明治医政界の中心人物のひとりで、衛生行政の創始者であり、政府の衛生局長や東京医学校長を歴任した。彼は後藤新平を見出して中央政界入りさせ、後藤や北里柴三郎(1853-1931)のドイツ留学を御膳立てした。明治十六年「大日本私立衛生会」発足時には、長與が副会頭で後藤が幹事であった。
- (10) 『書簡集』1908/7/1付 p.55
- (11) 『建築雑誌』第一四五号(1907/5/25) p.276-279
- (12) 『書簡集』1907/12/12付 p.45
- (13) 「デ・ラランデ邸」は「江戸東京たてももの園」に現在移築・復元中である。
- (14) 『書簡集』1908/9/13付 p.61
- (15) 『書簡集』1908/12/8付 p.68
- (16) 『ヴォーリス建築の二〇〇年』（ウィリアム・メレル・ヴォーリス展図録）二〇〇九年
- (17) 『書簡集』1909/3/30付 p.77
- (18) 明治四二年十月十六日登記
- (19) 『日本』土木建築号 明治四四年五月二五日付 『日本』は佐藤紅緑らも在籍した明治期の東京にあった新聞社（図6）
- (20) 尾張徳川家資料（図4）大正期の徳川義親邸正門（公益財団法人徳川黎明会提供）

- (21) 『書簡集』1911/8/11付 p.123
- (22) 『大東医事新報』第十一号、明治四四年七月十日発行。大正になり（現在は明治村に移築・保存されている）北里研究所を新築する際に、北里が「金杉に命じ担当技師に頼み」（田端重晟日記（大正三年十二月十八日付））とある。研究所がレル設計と直接裏付ける資料はないが、極めて彼に近い技能集団によると思われる。
- (23) 『建築雑誌』第二九二号（1911/4/25）p.221-223
- (24) シスター・ポール熊田薫子記『雙葉学園八十年の歩み』雙葉学園、一九八九年、p.51
- (25) 『書簡集』1910/12/1付 p.115
- (26) 『書簡集』1912/10/28付 p.130
- (27) 運輸省『日本ホテル略史』（初版一九四六年、復刻版 日本ホテル協会、一九八〇年）p.97
- (28) 外国人居留地比較研究グループ『ヤン・レルについて』他 ホテル・レビュー一九九八年度連載
- (29) 『建築雑誌』第一〇二二号（1968/10/20）市石英三郎著、『レター「原爆ドームとヤン・レル」』『建築画報』第二卷十三号口絵 1911/12（図5）
- (30) 宮城県内務部『松島公園経営報告』一九一五年発行 p.156
- (31) 宮城県史編纂委員会編『宮城県史 復刻版 13』一九八〇年 p.478
- (32) 『書簡集』1913/1/22付 p.133
- (33) 『書簡集』1912/12/20付 p.131
- (34) 『書簡集』1913/8/1付 p.140
- (35) 『The Japan Times』1913/11/29付 記事
- (36) 『書簡集』1914/5/2付 1914/5/21付 p.148
- (37) 『東京朝日新聞』大正十四年六月二四日付「東京駅の階上にあるトンネル長屋式のステイション・ホテルは鉄道省に年二万七千五百円の家賃を納めて株式会社精養軒の経営だ。（略）内部の設備はドイツ人レッケルに頼んだ」（関國光著「東京ステーションホテル開業時の内装設計者ヤン・レルについて」日本ホテル株式会社社内報三八号一九九五年五月発行より）
- (39) 『報知新聞』大正四（一九一五）年十一月三日付



図6 レッセルたちを紹介した新聞記事

『日本』土木建築号 明治四四年五月二五日付
 Drahomir Klicova 提供)

ヤン・レツルの建築活動（1907-1917）

	名 称	場所	計画・受注	設計	工事	完成	図面・掲載	レツル書簡	備考
○	神戸オリエンタルホテル	神戸				1908/2/19	平面図	1908/5/26	最終段階で関与か
○	ドイツハウス	横浜		1907	1907		立面図	1907/12/12	
	台湾総督府設計コンペ	台北		1907				1907/12/12	
	不詳	大阪			1907			1907/12/21	
	不詳	名古屋			1908			1908/1/15	
○	京都YMCA会館	京都			1908			1908/1/15	
○	デ・ラランデ邸	東京						1908/2/19	1908/4/15 越
	ドイツ大使館ホール改装	東京				1908/1/24		1908/1/21	
○	寺内子爵邸			1908			平面図3枚・正面立面図	1908/7/1	陸軍大臣寺内正毅
○	早川邸			1908		1910/5以前	建築雑誌（1910/5/25）	1908/7/1	早川千吉郎
	高田邸			1908				1908/7/1	高田釜吉か
	後藤男爵邸			1908			平面図・立面図	1908/7/1	逓信大臣後藤新平
	博覧会のパビリオン			1908				1908/7/1	オーストリア館
	ロシア大使館の建物							1908/7/6	函館領事館か
	スウェーデン大使館							1908/7/6	
	フランス大使館							1908/7/6	
	ホテル	東京						1908/7/6	
	不詳（神戸ラペス商会か）			1908			平面図2枚・立面図	1908/7/6	
	不詳			1908				1908/7/6	
	東京倶楽部設計コンペ	東京		1908				1908/7/6	1908/12/8応募
	不詳（フェルプス邸か）	京都					平面図2枚・立面図2枚	1908/8/11	
○	聖心女学院本館	東京	1908/10/7 （契約）	1909		1909/12	断面図・建築世界5-1・2 （1911/1・2）	1908/9/26	
	不詳（予算1万円）		1908					1908/12/8	
○	雙葉高等女学校校舎	東京	1909		1909/10	1910春	建築雑誌（1910/3/25）	1909/3/30	
○	大日本私立衛生会	東京	1909	1909	1909	1911/6/5	建築世界5-8・10 （1911/8・10）	1909/3/30	
○	長與男爵邸	東京	1909		1909	1910/5以前	建築世界6-1・2・3（1912- 1・2・3）	1909/3/30	
	不詳（個人宅2軒、うち1 軒はヘルマン邸か）				1909			1909/3/30	
○	雙葉会・小学校・寄宿舎	東京	1909/12以降			1911秋以降		1909/12/16	雙葉高等女学校内
○	暁星中学校	東京				1910春	建築雑誌（1968/10/20）		市石英三郎論文
	聖心の修道院	東京	1911/3		1911/8			1909/12/27	
	オープンハイマー商会	横浜	1909	1910				1909/12/27	
	オーストリア大使館別館	東京		1910				1910/3/2	
○	ブライアン邸	東京		1910		1917以前	建築画報7-7・8-3 （1916/7・1917/3）	1910/6/2	
○	上智大学校舎	東京	1910		1913/9	1914秋	建築世界8-1・2・3 （1914/1・2・3）	1910/12/1	
○	関口台教会のルルドの洞窟	東京			1910	1911/5/21	建築画報（年月日不詳）	1910/12/1	
○	雙葉・聖堂	東京	1911/3		1911/3/25			1911/3/24	雙葉高等女学校内
○	墓石	ブルノ						1911/3/25	
	外人墓地図案		1911春				建築雑誌（1911/4/25）		
	客室図案		1911春				建築雑誌（1911/4/25）		
	地方銀行設計コンペ							1912/2/6	
○	築地精養軒（改装部分）	東京	1909以降			1911頃	建築画報2-9・11・13 （1911/8・10・12）		
○	松島パークホテル	宮城	1911/9	1912	1912/4	1913/8		1912/5/26	松島公園経営報告
○	広島県物産陳列館	広島	1913	1913	1914/1	1915/4/5	建築世界8-7・8・10 （1914/7・8・10）	1913/8/1	
	ボーラー邸	バーデ ン	1913	1913				1913/8/1	デュッセルドルフ に変更か
○	宮島ホテル	広島	1913		1916/4	1917/7	図面（青焼き）一式・建築 世界9-1~3（1915/1~3）	1913/7/24	
	レストラン2軒	東京	1914			1914/3		1914/2/3	東京大正博覧会の 精養軒ビアホール
○	上野精養軒ホテル	東京				1917年以前	建築画報8-6（1917/6）		1917/10/1の台風 で倒壊
○	東京ステーションホテル （内装）	東京				1915/11/2			東京朝日新聞 1925/6/24

○：建築が確認された作品